

長崎の新聞、雑誌にみえる石炭（一）

武野， 要子
福岡大学商学部

<https://doi.org/10.15017/13557>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 2, pp.15-17, 1973-12-10. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

長崎の新聞、雑誌にみえる石炭 (一)

武野要子

長崎には崎陽雜報、西海新聞、鎮西日報、東洋日の出新聞、長崎報告雜誌など、幕末から明治にかけて発行された新聞や雜誌類が多い。当時、長崎が外来文化導入の窓口の一つであつたことを思えば、至極当然であろう。それらは地元長崎の記事のみならず、広くアジアの政治・経済や文化に関する記事を多くもっているのも、一つの特徴ではなからうか。左に紹介する長崎報告雜誌所収の「伊国皇族高島炭坑遊覧の略記」は、明治十年代初頭の高島炭坑の実態を窺うのに好個の資料の一つと思う。

イタリア皇族ゼノア公の来日について、『明治維新以後の長崎』は、明治十二年八月八日軍艦ウエットルビザ二号で東洋巡遊のため香港より長崎に寄港したこと、大波止より小蒸気船で飽ノ浦工作分局立神修船渠を巡覧し、帰路小菅修船場を遠望したこと、イタリア領事・県令内海忠勝ら随行者とともに長崎港外高島炭坑を巡視し、炭坑側は炭坑出炭高その他各種の概算書を贈呈したこと等を記している。明治十年代の長崎は、一口でいえば、長崎人の手で長崎商況を好転させる努力を始めた時ともいえるのであろうが、長崎の新聞にも長崎人の奮起をうながす投書や意見が目立っている。松田源五郎らを発起人とする長崎商法会議所の設置も、長崎人による長崎経済の退勢挽回のあらわれと考えられる。明治十三年の「長崎商法会議所議事録」は、長崎の商況についてその種類とそれが全体にしめる割合を次のように掲げている。

「支那人来港貿易	百分ノ三十二
欧米各国人来港貿易	全 四
朝鮮渡海通商	全 十
支那上海渡海通商	全 零箇五
高島炭坑	全 二十
本県庁所在	全 七
上等裁判所並地方裁判所所在	全 二
出納局出張所及諸官庁出張所在	全 一
外国聯合郵便船寄港	全 零箇五
肥後薩摩通航船汽船寄港	全 一箇五
工作分局及立神並小菅船渠トモ	全 七
各国軍艦寄港	全 三
病院並学校	全 零箇五
近国近隣村落人ノ需要品購買	全 六
刻煙草	全 一
縫針其他僅少	全 三

当時の長崎が幕藩時代に引続いて中国との貿易で繁栄していたこと、朝鮮貿易が全体の一割を占めていること、ヨーロッパ人との貿易は漸次低迷の一途を辿りながらもなお全体の七パーセントを占め、各国軍艦や郵便船の寄港をあわせれば、五十パーセントに上り、貿易

港としての面目を一応保つてゐることがわかる。注目せねばならぬのは、高島炭坑が長崎商況に占める重要性であらう。高島炭坑は長崎工作分局（三菱長崎造船所の前身）と共に、長崎の産業の重要な担い手であつたといえよう。

ところで、本資料で問題となる明治十二年の高島炭坑は、後藤象二郎が明治政府から払い下げを受けて五年目に当たる。その間、後藤象二郎が資金の調達に苦しみ、英商マジソン商会の事実上の支配下にあつたことは、周知の事実であらう。現地新聞の調査に基づいた上海総領事の報告によれば、同坑の出炭量は明治六年には日産六〇〇トンに達しており、日本一の生産量を誇つてゐる。長崎県統計表によれば、同十一年には年産八〇八九一トン、翌十二年には一九〇一四八トンに上昇したと本資料は記している。なお、同十一年七月末に起つた鉱夫の暴動と右の出産量の激増との関連性が問題であるが、本資料では明らかではない。結局、同十四年三月高島炭坑は三菱社に九七万余円で譲渡されるにいたつた。三菱社に譲渡された当時の坑内の模様を、英人技師ストダートは、「三菱会社が譲り受ケシ時ノ当炭坑ノ有様ハ、全ク危険ナリシニハアラザレドモ殆ンド保安線ノ極端ニ近ヅキ居リシナリ。夫ヨリ以来坑内ノ工場（切羽）ヲ其正当ナル有様ニ挽回セント欲シ、時日物品及ビ人夫ノ姿ニテ巨額ノ金銭ヲ費ヤシ、今ヤ其正当ナリト云フ有様ヲ獲取シ得タリ、ト此申報ニ記載ヲナスノ栄ヲ得タリ。……以下略」として、採炭機構の不備を指摘している。大体同年代の事実を示すと思われる本資料の内容と右のストダートの指摘を比較すれば、両者に若干の隔りがある。勿論本資料は外国皇族へ儀礼的に提出された報告書であつてみれば、多少の粉飾はあつて然るべきであらう。いづれにせよ、本資料は高島炭坑が三菱の傘下に入る直前の実態を窺うのに、興味深

いしくつかの問題を提供している。

「長崎報告雑誌 第貳拾号（明治十三年三月二二日発行）」

。伊国皇族高島炭坑遊覧の略記

（弊社幹事より皇族随行人官某氏へ送りたる書面なり）

明治十三年三月二一日伊太利帝国の皇族ゼノア公殿下高島炭坑を臨視せらる。高島は則ち長崎港の海門に在る島嶼、炭坑は則ち、我帝国の元老後藤君の主管する所にして島小なりと雖も名を地球の東方に専らにしざる煤田なり坑狭しと雖も世に無尽蔵の評を博したる金穴なり今茲に殿下の親臨するは蓋し殿下の軍艦長崎港碇泊中坑主後藤君の自ら迎ゆる所なりと而して此日同く招きに応じたるは貴国領事士官各位にして君は則ち其一人なり、内人は長崎県令内海君上等候所長岡内君及外務官吉田泉官堀の諸君にして笠原も亦陪侍の榮を辱ふせり。さて坑主より饗応に美を呈し送迎に礼を尽したる等の次第は暫く聞き彼の炭坑に関する景況を記載すれば地中の坑脈は蔓延長大にして坑内殆んど別世界の觀を為せり隧道は頗る堅固にして空気の流通亦最も宜しく此隧道は数百間の長きに連亘するも炭塊の運送には更に人力を費さずして全く蒸氣機関の力を用ひたり而して坑口と船場と相距る僅かに数十間なるを以て炭塊を船船に積載する亦更に人力を費す事なし加るに港口の形勢は大船巨船を容るるに恰も好きを以て同坑今日の隆勢を来すや運送の便回漕の利共に力ありと謂ふべきなり是等の実況は殿下の親しく電覽する所なるを以て更に細陳せざるも殿下の賢明なる其全体を觀察し玉ひ以て彼の名を東方に轟かし世に無尽蔵の評ある本坑の実況を領會あり玉ひしを信

するなり殊に感ずべきは殿下の炭坑を臨視せらるるや能く枢要の事物に尊眼を注ぎ玉ひ彼の数百丈の地下を開通したる坑内に至ては常人余輩の如きも悚然として危懼する所あるに殿下は毫も之を貴意に介し玉はず容願の麗るはしかりしは県令内海君にも窃かに殿下交誼に厚きの一斑を感称せられたりと聞く又饗応の席に於て後藤君より殿下の親臨を謝し且各国皇族の臨視は今日を以て始めとす是れ本港の光榮なりと演べたるに殿下の答へ玉ひ今日有名の炭坑を視るを歎び内外結構の能く整ひたるを感ぜりと演べられたり殿下の答辞は僅かに双語に止るも其意味の深き余が前に陳たる數十語も猶及ばざるが如し是れ殿下の賢明なる能く其全体を觀察し給ひしと信ずる所以なり然り而して余は昨日君と約する言を踏み其大略を筆記し以て君に呈し且つ副るに別紙出炭高等の該算書を以てす若し殿下高島遊覧の事を記する参考の一端となるあらば望外の幸なり。

(別紙次号)

「長崎報告雑誌 第廿七号 (明治十三年三月廿九日発行)

○高島炭坑へ伊国皇族遊覧略記の続き

(随行上官に報知したる別書の写し)

- 高島炭坑昨十二年中出炭高は凡拾九万百四拾八噸なり
- 即今毎老日の出炭高は凡六百五拾噸なり
- 炭質の良品たるは世人の信用する所なるを以て別に記せず
- 坑内に使役する坑夫の数は凡三千二百人なり
- 坑内運炭に使役する馬の数は四拾三頭なり
- 所有する船舶の数は汽船大小二艘運送船八十八艘なり

○隧道中鉄道運炭箱車の数は七百箇なり

○高島炭坑事務取扱役員

副事務長

全上

石炭受渡兼運輸支配人

瓜生 震

第老坑支配人

高谷 綾三郎

第二坑支配人

高取 伊好

金銀出納兼支給支配人

下村 省助

石炭受渡兼運輸支配人

富田 秀三

其他役員三十七名雇外国人拾二名